

三重大学人文学部文化学科『人文論叢』第四一号 別冊
二〇二四年三月発行

思い出の〈須磨〉——『源氏物語』若菜巻の表現方法として——

亀田夕佳

思い出の〈須磨〉——『源氏物語』若菜巻の表現方法として——

亀田夕佳

【要旨】

『源氏物語』若菜巻では「須磨流離」について多くの人物が想起し、個々の人物によってその思い出の様相が異なるさまが語られている。本論は特に紫の上と光源氏が、どのように須磨の思い出と向き合うのかを取り上げ、紫の上の切実さに反して、光源氏が浮薄な姿勢であることを述べる。同じ思い出であるがゆえに、価値観の違いを如実に露呈させる点に、長編物語ならではの表現方法の達成を指摘する。

一、問題の所在

若菜上巻には、女三宮降嫁をめぐる紫の上の苦悩が描かれる。次はその端的な場面である。

（一）あまり久しき宵居も例ならず、人や咎めむと、心の鬼に思して入りたまひぬれば、御衾まゐりぬれど、げにかたはらさびしき夜な夜な経にけるも、なほただならぬ心地すれど、かの須磨の御別れのをりなどを思し出づれば、今ほとかけ離れたまひても、ただ同じ世のうち^①に聞きたてまつらましかばと、我が身までのことはうちおき、あたらしく悲しかりしありさまぞかし。さてその紛れに、我も人も命たへずなりなましかば、言ふかひあらまし世かは、と思しなほす。

（若菜上、④六七〜六八頁^①）

光源氏が女三宮を六条院に受け入れることが決まった。四十賀を目の前に、正妻格として老後を共に生きる準備をしていた紫の上にとつて、それは想像だにできない衝撃であった。右はそうした心の動揺を抱えながらも、女三宮を六条院に迎え入れた後、今夜通えば、正式な婚姻が決定づけられるという三日目の夜の場面である。

紫の上は若妻のもとに向かう光源氏のために衣を美々しく整え、送り出した。女三宮の住居では、お祝いムードで華やかに賑わっているに違いない。右の場面の前には、「おいらか」な態度を変えまいとする紫の上と、そんな紫の上に対して同調しかねる女房の姿が語られもしている^②。傍線部「心の鬼」からは、日中は平穏を取り繕った紫の上^③が、実のところ周りの視線と闘っていたことが知らされる。

そんな紫の上が、この一晚をなんとかして乗り越えるにあたり、すぐのように思い出したのが「須磨の御別れのをり」だったとされる。ここについては『岷江入楚』では「かやうの時の事まで覚してなくさめ給へるこゝろもけにたゝならぬ御心中なるべし^④」とし、十五年近く前の出来事を引き合いに出さねばならない心情であったと指摘しているが、あの須磨流離をともに乗り越えたことが、この場面で紫の上が辛い現実をやりすごすための切実な支えとなっているのである。「我も人も命た

へずなりなましかば」という「命」を引き合いに出した表現も、次節で取り上げるように、須磨の別れの場面からの連想である。

若菜上巻において、紫の上が危機的状況を堪えるにあたり、なぜ「須磨の御別れのをり」が選ばれたのだろうか。「須磨流離」が、光源氏と紫の上にとって最大の試練として、物語に繰り返し語られることについてはさまざまに論じられ、登場人物の心情の表れとして理解されてきたが⁴⁾、改めて若菜巻の表現方法として考えたい。同じ出来事を複数の人物が思い出すことによつて、どのような表現世界が獲得されたのか、問いたいのである。

二、紫の上の〈須磨〉

若菜上巻で紫の上は、これまで経験したことの無い現実に向き合う。そこで彼女が押しつぶされそうな気持を保つために、思い出していたのが、光源氏と離れ離れになった須磨に退去していた時間だった。紫の上が思い出していた「御別れのをり」は以下のように描かれていた。

〔2〕その日は、女君に御物語のどかに聞こえ暮らしたまひて、例の、夜深く出でたまふ。狩の御衣など、旅の御よそひ、いたくやつしたまひて、「月出でにけりな。なほすこし出でて、見だに送りましたまへかし。いかに聞こゆべきこと多くつもりにけりとおぼえむとすらむ。一日、二日たまさかに隔つる折だに、あやしういぶせき心地するものを」とて、御簾巻き上げて、端にいぎなひきこえたまへば、女君、泣き沈みたまへる、ためらひてゐざり出でたまへる、月影に、いみじうをかしげにてゐるたまへり。わが身かくてはかなき世を別れなば、いかなるさ

まにさすらへたまはむと、うしろめたく悲しけれど、思し入りたるに、いとどしかるべければ、

生ける世の別れを知らで契りつつ

命を人に限りけるかな

はかなしなど、あさはかに聞こえなしたまへば、

惜しからぬ命に代へて目の前の

別れをしばしとどめてしがな

げに、さぞ思さるらむと、いと見捨てがたけれど、明け果てなば、はしたなかるべきにより、急ぎ出でたまひぬ。

（須磨、②一八五〜一八六頁）

都での生活が穏やかならぬものになり、方々に別れを告げ、とうとう別れの朝となった場面である。ほんの一、二日顔を見ないだけでも心配でならない紫の上は、「泣き沈みたる／思し入りたる」とされるように、別れの悲しみに暮れている。「生ける世の」の歌は光源氏の歌だが、「あさはかに聞こえなし」とあるように、深刻な別離について、大したことではないように扱い、何とか紫の上の悲しみを和らげようとしている。

対する紫の上の返歌は、玉上琢也が「全身でぶつつかかってきた」と評しているが⁵⁾、何でもないことのように取り紛らわそうとする光源氏の配慮とは対照的に、思いの強さを素直に伝えるものになっている。「惜しからぬ命にかへて」は、自らの命を差し出しても、光源氏との別れを引き延ばしたいという気持ちをストレートに伝えているものであり、光源氏の歌の「別れ」「命」の表現を用いてはいるが、別れることを自明のものとする光源氏に対し、紫の上の歌はその別れを全身で否定しようとする返しになっているのである。「げに、さぞ思さるらむ」は、その

紫の上の思いを光源氏が受け止めたことを示している。

若菜上巻では「我も人も命たへずなりなましかば」と、紫の上の心に即して、光源氏と二人ともに生きていくことがかみしめられる様に語られているが、そうした感慨は「惜しからぬ命に代へて」と自らの命を差し出すようにして願った須磨の別れをふまえた言葉なのだといえる。

先に示した若菜上巻の場面では、紫の上と女三宮の対面はまだ行われていない。朱雀院を父とする高貴な姫君を想像するしかない紫の上にとって、過酷な状況を乗り越えるために、光源氏との揺るぎない信頼関係を培った須磨の時間を思い起こす必要があったといえるだろう。右にみたように、その別れは、紫の上は自らの思いを包み隠さずひたすらにぶつけることができた瞬間でもあった。女三宮降嫁が決まってから、自らの本音をひた隠しにしてきた紫の上にとって、「かの須磨の御別れのをり」は、言いたいことを遠慮なく言うことができ、その思いをしつかりと受け止めてもらえたという、かけがえのない体験であったといえるのではないだろうか。

このように、紫の上にとって、須磨の思い出が光源氏との強い連帯感をもたらしものであったことは物語にくり返し描かれている。例えば絵合巻には次のようにある。

〔3〕かの旅の御日記の箱をも取り出でさせたまひて、このついでにぞ女君にも見せたてまつりたまひける。心深く知らで今見む人だに、すこしもの思ひ知らむ人は、涙惜しむまじくあはれなり。まいて忘れがたく、その世の夢を思ひさますをりなき御心どもには、とり返し悲しう思し出でらる。今まで見せたまはざりける恨みをぞ聞こえたまひける。

ひとりみて嘆きしよりは

海人のすむかたをかくてぞ見るべかりける

おぼつかなきは、慰みなましものをとのたまふ。いとあはれと思して、

うきめ見しそのをりよりも

今日はまた過ぎにしかたにかへる涙か

(絵合②、三七七〜三七八頁)

絵合巻では、前齋宮の入内から語られる。冷泉後宮には早くから内大臣と右大臣四君の娘である弘徽殿女御が入っており、同年代の帝と仲睦まじく過ごしていたが、そこに帝の母である藤壺宮の意向で、六条御息所の娘の前齋宮が、梅壺女御として入内するのである。巻名にもあるように、この巻では、絵が好きで帝のために、頭中将と光源氏がさまざまに絵を蒐集し「絵合」として競い合うさまが描かれていく。

右は、絵を集めるに際して、光源氏が須磨明石に流離した辛い時期に記していた絵日記を取り出す場面である⁶。日記を見た紫の上は「今まで見せたまはざりける恨み」とあるように、もつと早く見せてほしかったと、光源氏に恨みごとを言うのであるが、続く二人の和歌には「海人／かた／みる／うきめ／かへる」といった海浜にまつわる修辭が贈歌にも答歌にもともに用いられ、「嘆きしよりは／そのをりよりも」という歌のリズムにも同じ呼吸を見ることができるといえる。

もとより、この絵日記の執筆時には光源氏は紫の上の返歌を想定していたとされ、紫の上も同じように日記を書いていたことが明石巻に語られている。以下に示す。

〔4〕絵をさまざま描き集めて、思ふことどもを書きつけ、返りごと聞
くべきさまにしなしたまへり。見む人の心にしみぬべき物のさまな
り。いかでか空に通ふ御心ならむ、二条の君も、ものあはれに慰む
方なくおぼえたまふをりをり、同じやうに絵を描き集めたまひつつ、
やがてわが御ありさま、日記のやうに書きたまへり。いかなるべき
御さまどもにかあらむ。
(明石②、二二六一頁)

光源氏が筆を執るさまは、須磨・明石にわたって描かれている。右は
明石君と出会い、心惹かれていくとされる段階で、絵を描いていること
が語られる場面である。先にも述べたが、光源氏は「返りごと聞くべき
さま」とあるように、紫の上に見せた際の返歌を書き記すことができる
ようにしている。目の前の明石君の存在はそれとして、遠く離れた紫の
上を想わずにはいられない光源氏の心情が日記の余白として表れている
のだといえよう。そして、この時、二条の君である紫の上も光源氏と同
じように絵を描いていたことが、「いかでか空に通ふ心ならむ」、「いか
なるべき御さまざまにかあらむ」というように、「いかでか／いかなるべ
き」と不可思議であるとされるほどに、二人の心の結びつきの強さとし
て語られているのである。

絵合巻には日記を見た光源氏と紫の上について「その世の夢を思しさ
ますをりなき御心ども」とし、びつたりと同じ悲しみを共有する二人で
あるとされているが、そうした表現は、日記執筆時に示された二人の心
の繋がりや強さを踏まえたものであるといえるだろう。

さて、ここまで、若菜上巻において、紫の上が究極に追い詰められた
状況下で、「須磨の御別れのをり」の思い出が選ばれた理由について考
察してきた。紫の上にとって、「須磨の御別れ」は、光源氏に本音をぶ

つけることのできた瞬間であり、帰京後は苦難を共に乗り越えた証とし
て、同じ悲しみを共有することのできたかけがえのない「思い出」であつ
たのだといえよう。

ここで、本論が問題にしたいのは、その切実な「須磨の思い出」が、
朧月夜と交流する際には、恋の雰囲気を感じ上げる小道具のようにして
用いられている点である。考察を続ける。

三、朧月夜との逢瀬と紫の上

繰り返しになるが、女三宮が六条院に迎えられたことは、正妻格とし
て扱われてきた紫の上にとって、これまでにない苦しみをもたらすもの
であった。冒頭に引用した場面（1）の後には、女三宮から幼い返歌が
遠慮のない形で届くなどし、光源氏は紫の上への尊敬と愛着を一層深め
てゆくが、紫の上と女三宮の対面はまだ果たされず、紫の上からすると、
実体を知らない相手と対峙する時間が続いている。興味深いのは、その
紫の上の苦しみに連続して、朧月夜と光源氏の逢瀬が描かれる点である。
左に流れを確認しておく。

- (a) 玉鬘による若菜賀が行われる
- (b) 二月女三宮を迎え入れる
- (c) 紫の上、三日目の夜を堪える
- (d) 朱雀院から文が届く
- (e) 朧月夜との逢瀬
- (f) 桐壺女御解任し、里に下がる
- (g) 紫の上と女三宮の対面

右の(e)における、朧月夜の登場については、従来、文脈の違和感

が指摘され、このタイミングで朧月夜との十五年ぶりの逢瀬が描かれる意義についてさまざまに論じられてきた⁽⁷⁾。(e)については、挿話というには長大な筆が費やされているため、巻全体からすると浮いているような印象は否めないが、朱雀院の動静を語る展開からは「齟齬」があるとははいえないだろう。

朧月夜との関係については、(g)の女三宮の対面を控えて、紫の上をはじめする女君たちが対面の準備で忙しくしている際にも「かの忍び所に、いとわりなくて出でたまひにけり。いとあるまじきことと、いみじく思し返すにもかなはざりけり」と、喧噪に紛れて密会を重ねたとされている。あやにくな二人の関係は、大井田晴彦氏が「紫の上と女三宮との板挟みとなって息苦しさを感じる源氏の、現実からの逃避であることに注意しておきたい⁽⁸⁾。」と解されるように、光源氏や朧月夜の弱さや狡さを物語に語るしくみだと考えることができる。

朧月夜との逢瀬については、多くの議論が行われているが、「物語の語りのしくみ」として捉える視座を提供してくれたのは増田繁夫氏である。増田氏は次のように述べる。

「朧月夜との逢瀬は、物語の経過としてはやや唐突で、十分な必然性をもつでき事として、説得的に描かれているとはいえない。これは、新しい女三宮のことだけではなく、昔の朧月夜との関係によっても紫上を苦しめようとする、物語の側からの要請によるところがあるのかもしれない⁽⁹⁾。」

増田氏が朧月夜との逢瀬を「物語の側からの要請」とされたことを、ど「どのような表現で語られているか」という、「物語の表現方法」と

して考えてみたい。すると、二人の逢瀬を導く文脈に、ことさら紫の上と関わる表現が配されていることに気づく。具体的に示そう。

〈5〉女君には、「東の院にもする常陸の君の、日ごろわづらひて久しくなりにけるを、もの騒がしき紛れにとぶらはねば、いとほしくてなむ。昼などげざやかに渡らむも便なきを、夜の間に忍びてとなん思ひはべる。人にもかくとも知らせじ」と聞こえたまひて、いといたく心化粧したまふを、例はさしも見えたまはぬあたりを、あやしと見たまひて、思ひあはせたまふこともあれど、姫宮の御事の後は、何ごとも、いと過ぎぬる方のやうにはあらず、すこし隔つる心添ひて、見知らぬやうにておはす。その日は、寢殿へも渡りたまはで、御文書きかはしたまふ。薰物などに心を入れて暮らし給ふ。

〈中略〉

夜いたく更けゆく。玉藻に遊ぶ鴛鴦の声々など、あはれに聞こえて、しめじめと人目少なき宮のありさまも、さも移りゆく世かなと思しつづくるに、平中がまねならねど、まことに涙もろになむ。昔に変わりとおとなおとなしくは聞こえたまふものから、これをかくてやと引き動かしたまふ。

(若菜上、④七九〜八一頁)

右の前半では光源氏が末摘花を見舞うためだと言葉を偽り、いそいそと準備をする。「少し隔つる心添ひて見知らぬやうにておはす」は、紫の上の様子である。後にも示すが、逢瀬を挟みこむようにして本音を言わない紫の上の態度が語られる。本論が注目するのは、朧月夜の邸を訪れたところで、「鴛鴦」や「平中」といった、紫の上まつわる表現が見られる点である。

まず「玉藻に遊ぶ鴛鴦の声々」についてであるが、諸注釈において「春の池の玉藻に遊ぶには鳥の足のいとなき恋もするかな（後撰集、巻第二、春中、題知らず、宮道高風、七二）」が引かれ、「には鳥」を「鴛鴦」に言い換えた趣向であるとわかる。「足のいとなき恋」は、すでに若くもない二人の恋路を皮肉に照らすといえようか。

ここで問題となるのは、「には鳥」をあえて「鴛鴦」に変えた意味であろう。新編日本古典文学全集頭注では「鴛鴦は夫婦仲が良い。その声が源氏の気持ちこそそる¹⁰⁾。」とされているが、以下に示すように、雌雄の仲睦まじさは「には鳥」の特徴でもあり、あえて「鴛鴦」とした理由を考えるべきだと思われるからである。

A 池水に玉藻しづむはには鳥の思ひあまれるなみだなりけり

（宇津保物語、藤原の君、①一五〇頁）

B には鳥の水のせきにとぢられて玉藻のやどをかれやしぬらん

（好忠集、三六一）

題知らず

みつね

C 冬の池に住むには鳥のつれもなくそこにかよふと人にしらすな

（古今集、巻十三、恋三、六六一）

Aは『宇津保物語』藤原の君で、正順邸の中島でには鳥が鳴いているの聞き、源仲済が同腹のあて宮に詠みかけた歌である。「玉藻しづむ」には恋に苦しむ気持ちが進められているといえよう。Bの『好忠集』において、「には鳥」は「玉藻」との連想関係が指摘できる。そして、C『古今集』に「つれもなく」とあるのは、「には鳥」は「雌雄連れ添って水に潜る生態に依拠している¹¹⁾」とされている。

では、ここで『源氏物語』における「鴛鴦」について確認しておこう。物語中に「鴛鴦」は三か所に見られたが、先にも少し触れたように、紫の上にまつわる表現であった。

D 髪ざし、面様の、恋ひきこゆる人の面影にふとおぼえてめでたければ、いさか分くる御こころもとりかさねつべし。鴛鴦のうち鳴きたるに

かきつめてむかし恋しき雪もよに

あはれを添ふる鴛鴦のうきねか（朝顔、②四九四頁）

E 水鳥どもの、つがひを離れず遊びつつ、細き枝どもをくひて飛びちがふ、鴛鴦の波の綾に文をまじへたるなど、物の絵様にも描き取らまほしきに

（胡蝶、③一六七頁）

Dは朝顔巻で光源氏が女性談義を行う場面である。藤壺宮への思いを面差しが似てきた紫の上に重ねてみる光源氏の姿勢は、鴛鴦の睦まじさとは対照的だといえるが、紫の上を目の前にしているからこそ、描くことのできた情景であるといえる。Eは胡蝶巻に描かれた春の町の庭である。「つがひ離れぬ」水鳥たちとの連続に鴛鴦が理想的に描かれている。『源氏物語』に「鴛鴦」は数多く登場するわけではないが、そのすべてに紫の上が関わっており、次に取り上げる「平中」と同じく、紫の上との分ちがたい連想関係にあるといつてよいのではないだろうか。

改めて〈5〉に戻ると、朧月夜を訪れた光源氏は、「平中がまねならねど、まことに涙もろになむ。」とされ、鳥辭物語の主人公である「平中」を引き合いに出され、涙もろさが語られている。こうした姿については清水好子氏が「戯画的」とし、「コミカルな調子が出ている」と指摘して

いる¹³⁾。

清水氏も述べているように掛け金を外そうと「引き動かす」などという様子は、これまでの光源氏については決して語られなかった要素である。墨汁の涙を流した平中納言のように、恋物語の主人公として誇張されている。しかし、「平中」が『源氏物語』でどのように登場しているかを考えると、ここにも紫の姿が引き込まれていると言わざるを得ないのである。「平中」についても、以下のように、紫の上との関わりで描かれていた。

F 「平中がやうに色どり添へたまふな。赤からむはあへなむ」と戯れたまふさま、いとをかしき妹背と見えたまへり。

(末摘花、①三〇六頁)

右のFは、光源氏が幼い紫の上を熱心に養育する「手習」の場で、末摘花を模して鼻を赤く染めて戯れる場面である。遊びのお絵描きの延長線上に紫の上の学びが施され、「妹背」の仲睦まじさとされている。

朧月夜と光源氏の逢瀬において、須磨の思い出がどのように語られているかを考えるために、その逢瀬に導く文脈をたどってきた。「鴛鴦」や「平中」といった表現は、それぞれに物語においては紫の上に限定して用いられていることがわかった。

物語は、初老というべき二人の逢瀬をあたかも悲恋物語の主人公であるかのように語るが、その始まりに、空間を隔てたところで独り苦しんでいる紫の上の姿が呼び込まれているのではないだろうか。

先に、増田繁夫氏によって朧月夜との逢瀬は「紫の上を苦しめようとする、物語の側からの要請」と指摘されていることを述べたが、二人の

逢瀬の冒頭に、紫の上にか用いられなかった表現が配されていることによつて、苦しみを理解されない孤絶がいつそう強調されていると考えられるだろう。次節では、紫の上が抛り所にしていた須磨の思い出を、光源氏は浮薄な恋の道具にしていることを述べる。

四、光源氏の〈須磨〉

次に示すのは、朧月夜と密会し帰宅するにあたって、二人が須磨の思い出を題材に歌を詠みかわす場面である。

〈6〉なごり多く残りぬらむ御物語のちめは、げに残りあらせまほしきわざなめるを、御身を心にえまかせたまふまじく、ここの人目もいと恐ろしくつつましければ、やうやうさし上がりゆくに、心あわたたしくて、廊の戸に御車さし寄せたる人々も、忍びて声づくりきこゆ。人召して、かの咲きかかりたる花、一枝折らせたまへり。

沈みしも忘れぬものをこりずまに

身もなげつべき宿のふぢ波

いといたく思しわづらひて、寄りゐたまへるを、心苦しう見たてまつる。女君も、今さらになつつましく、さまざまに思ひ乱れたまへるに、花の蔭はなほなつかしくて、

身をなげむふちもまことのふちならで

かけじやさらにこりずまの波

いと若やかなる御ふるまひを、心ながらもゆるさぬことに思しながら、関守の固からぬたゆみにや、いとよく語らひおきて出でたまふ。その昔も、人よりこよなく心とどめて思うたまへりし御心ざしなが

ら、はつかにてやみにし御仲らひには、いかでかはあはれも少なからむ。いみじく忍び入りたまへる御寝くたれのさまを待ちうけて、女君、さばかりならむと心得たまへれど、おぼめかしくもてなしておはす。
 (若菜上、④八三〇―八五頁)

久しぶりの逢瀬は名残が尽きない。須磨に赴きつかけとなったのは藤花宴であった。同じ邸宅、同じ藤の花である。二人が詠んだ「こりずま」について、縄野邦雄氏は「須磨流離の過去を呼び返す語として注目される」と指摘する。縄野氏も述べておられるが。「こりずま」は「恋」の文脈をいう表現である。いくつか示す。

題知らず

読み人知らず

G こりずまに又もなきなはたちぬべし

人にくからぬ世にしすまへば

(古今集、卷第十三、恋歌三、六三二)

あだに見え侍りけるをとこに

よみ人しらず

H こりずまの浦の白浪立ちいでてよるほどもなくかへるばかりか

(後撰集、卷第十二、恋四、八〇〇)

こほりしたるあした人に

I 冬の夜の袖の氷のこりずまに恋しき時はねをのみぞなく

(兼盛集、四五)

「こりずま」は「恋歌」に用いられ、「懲りず」を掛詞にするような激しい恋をいうものである。そうした激しさはG「なきなはたちぬ」、H「白浪立ちいでて」といった、海浜の「須磨」であるがゆえに「波」と連続している点にもみることができらる。また「凝りず」

の掛詞からはI「氷」と結ばれることもあるが、それは「ねをのみぞなく」からわかるように辛い恋の涙が凍ったものなのである。

管見によると、「こりずま」と「ふち／ふち」を詠みこんだ例は、当該場面二首のみであった¹⁰。「藤／ふち／淵」の連想から、「身を投ぐ」という過激な表現が導かれたと考えられるのである。そうした二人の恋については「いと若やかなる御振る舞い」とされることによって、彼らが決して「若くない」年齢であると語られているのである。

ここでの贈答歌は「身を投ぐ／こりずま／ふち／なみ」というように、須磨に関わる歌ことばを過剰なほどに対応させ、恋物語に酔いしれている詠みぶりであるが、その過剰な物言いは、通常「こりずま」とは連想関係を持たない「藤／ふち」を詠みこんだためであるといえるだろう。「藤／ふち／淵」であるがゆえに、「身も投げつべき」や「身を投げむ」というような疑似心中といった趣の贈答が可能になったと考えられるのである。

引用文の末尾は、朝帰りした光源氏に対する紫の上の反応であるが、光源氏を送り出した¹¹において「見知らぬやうに」という態度であったのと照応するように「おぼめかしくもてなしておはす」とあり、逢瀬の前後に紫の上の心が光源氏から懸隔を生じていることが語られている。

何より決定的であるのは、紫の上と光源氏の「須磨の思い出」に対する姿勢の違いである。女三宮の存在によって、息をするのも辛い状況におかれた紫の上が命綱のように抱きしめていたのが「須磨の思い出」であったが、光源氏は、その同じ思い出を、朧月夜との息抜きのような恋愛を盛り上げるためのスパイスとして利用しているのである。

このように、大切な須磨の思い出の価値を踏みこむような展開を通

して、紫の上の孤絶が表現されているといえるだろう。紫の上の晩年の孤独は、光源氏でも女三宮でもなく、「物語の表現」そのものによって、残酷に仕上げられているといえるのではないだろうか。

五、まとめ

若菜巻では女三宮降嫁を端緒として、それまで抱え込まれた矛盾や不和が顕在化する。本論は、紫の上と光源氏が「須磨の思い出」をどのようにつまえるかを考察し、それぞれの切実さに差異が認められることを指摘し、紫の上の孤絶を残酷に語る長編物語の表現方法であるとの結論を得た。

【注】

- 1 『源氏物語』、『宇津保物語』の本文は、新編日本古典文学全集、和歌は新編国歌大観により、巻名・頁数等を示した。私に表記を改めた箇所がある。
- 2 当該場面の前には、「さぶらふ人々も、「思はずなる世なりや。〈中略〉かならずわづらはしきことも出で来なむかし」などおのがじしうち語らひ嘆かしげなるを、つゆも見知らぬやうに、いとけはひをかしく物語などしたまひつつ夜更くるまでおはず」（若菜上、④六六頁）とある。
- 3 『岷江入楚』（『源氏物語古注集成』、桜楓社、一九八二年）。
- 4 高野典子氏『源氏物語』光源氏と紫の上、それぞれの「須磨退去」——心的関係を照らすものとして——（『日本古代文学と東アジア』、勉誠出版、二〇〇四年）は、「須磨退去」を通して、光源氏と紫の上の精神的距離が如実に示されると解する。
- 5 玉上琢也『源氏物語評釈』第三卷（角川書店、一九六五年、六九頁）。
- 6 伊井春樹氏は、「旅の御日記」について執筆当初のものから編纂が加えられていると指摘する（『須磨の絵日記から絵合の絵日記へ』、『中古文学』三九号、一九八七年

五月）。

- 7 秋山虔「若菜」巻の一問題——源氏物語の方法に関する断章」（『日本文学』、一九六〇年七月）、清水好子「若菜上下巻の主題と方法」（『源氏物語の文体と方法』、東京大学出版会、一九八〇年）、縄野邦雄「若菜上巻の源氏と朧月夜の逢瀬について——若菜上下巻の主題との関連を中心に——」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊文学・芸術編』第二集、一九九五年二月）、平林優子「若菜巻の於朧月夜と光源氏」（『東京女子大学紀要論集』第六二号、二〇一一年九月）。
- 8 大井田晴彦「朧月夜論」（『名古屋大学人文学研究論集』第五号、二〇二二年三月）。
- 9 増田繁夫「若菜巻の紫の上」（『国語と国文学』第七五卷一、一九九八年十一月）。
- 10 新編日本古典文学全集、第四卷、八六頁（小学館、一九九六年）。
- 11 久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店、一九九九年、六六二頁）。
- 12 清水好子「朧月夜再会」（『講座源氏物語の世界』第六輯、有斐閣一九八一年）。
- 13 前掲注7 縄野氏論文。
- 14 和歌の検索には「日本文学 Web 図書館」（古典ライブラリー）を用いた。「こりすま・こりすま・こり須ま・こり須磨」を含むものは、平安時代で七七例あったが、そのうち「ふち・ふぢ・藤・淵」も含む用例は、当該場面における光源氏と朧月夜の贈答歌の二首のみであった。